

編集後記

気候の変化が激しい。Global warming が叫ばれて久しいが今年も梅雨時の大雨，その後の猛暑と日本列島自体が温帯地域から亜熱帯地域に移行した感がある。猛暑のさなか，8月中旬に入り，今年も甲子園では高校球児たちが熱戦を繰り広げている。それを横目に見ながらこの編集後記をしたためている。

さて消化器外科学会雑誌への投稿は圧倒的に症例報告が多い。本号でも原著は佐藤論文1編のみであり，残り13編は症例報告である。症例報告は各著者の臨床経験から得られた貴重な経過報告であり，高校野球に例えて恐縮だが，いわば日々のきめ細かい診療から得たシングルヒットといったところだろうか。一方，原著論文の作成は大変である。原著を仕上げるにはある作業仮説（working hypothesis）に基づいた研究デザインを作成することに始まる。それにしたがって，適正な検討症例数を集め，データを整理し，その結果を科学的に解析することが必要である。この一連の作業は大変な労力を要するが事象を科学的に判断するうえできわめて有益である。一定数の症例を集積して得られた結論はときには「従来の常識」を覆す結果を示唆するかもしれない。いわば3塁打，ホームランといった一発長打である。その努力ならびに成果はおおいに賞賛したい。しかしよく考えてみると原著のモチベーションとなるのは作業仮説であり，それは日々の診療経験によってもたらされることが多い。いきなり素晴らしいテーマを思い付くものではなく，臨床経験の積み重ねから「これまでの常識と異なることがあるのでは？」、「こういう切り口で研究してみると面白いのでは？」といった発想が生まれてくるものである。

あるバッテリーがインタビューで「ホームランは狙うのではなく，あくまでもヒットの延長と捉え，常にジャストミートを中心掛けている」と優等生的に答えていた。「なるほど」とうなずきながら，その次の打席をみると思いきりホームラン狙いといった空振り三振で苦笑したことがある。ジャストミートと言いながらも時には意識的に狙わないとホームランは打てないものであろう。編集委員の立場からはシングルヒットの症例報告ばかりでなく，時にはホームラン狙いの骨のある原著論文も期待したいところである。

（奥野清隆）